
黒幻の陰陽師

翳鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒幻の陰陽師

【Nコード】

N2649BA

【作者名】

翳鴉

【あらすじ】

いつも教会の庭の木で寝ている少年、雛雅。いつも自由気ままにしていたが、ある日村人を襲う妖怪が現れると噂で聞いて…。

『黒幻の騎士』と繋がるストーリー。

プロローグ

「俺は……死にたくない……」

なら、お主の対価を払え。

俺は人間が大嫌いだ。
自由気ままな生き物。
それだけで腹が立つ。

「雛雅！下りないと危ないぞ！」
ひなが

「ZZZZ。」

「また寝てるのか。」

俺がもつとも好きなのは……。

”妖”だけだ。

俺と同類のような存在だから。

平鬼 雛雅
ひらき ひなが

16歳の男。

生意気で冷たくて自分勝手。

人間が大嫌いで妖を好む。

”黒幻の陰陽師”の称号を得ている。

教会で住んでいる。体が弱い。

教会の庭の木が大好き。

悪那 梗式
あくな こうしき

19歳の男。

明るくて誰にでも優しくて結構お節介で心配症。

雛雅とずっと一緒に居る。

雛雅にとって必要不可欠と言える存在？

お兄さんの存在。教会で住んでいる。

雛雅の手伝いをしている。

はまむら
浜村 美麗

16歳の女。

明るくて元気で優しくて結構強がり。

教会に住んでいる。

雛雅と梗式と一緒に居る。

妖はあまり好きではないらしい。

1話 少年

人間は、大嫌いだ。

「ふわぁ〜…あれ？雛雅は？」

「いつものところだよ。」

「分かった。」

村外れにある、教会。

数人しか住んでいない。

だけど、若い村人はちよくちよくその教会に遊びに来る。

「雛雅。」

「Zzzzzz。」

一人の少年が教会の庭の木で眠っていた。

「俺は……生きたい……。」

なら、お前の対価を払え。

パチッ

「……。」

少年が目覚めます。

「雛雅。」

「梗式……。」

「どうかしたのか？」

「知っているか？この頃の村の噂。」

「ああ、知ってる。」

「村人を襲う妖怪：妖はそんな事しない。」

「そうとは限らない。」

「！？…まあ、いいけど。俺今日一日村に居てるから。」

「なら、俺も！」

「いい。俺一人の方が目立たないし、お前が傷つく事もないだろう？」

「だけど…。」

「いいから、ここに居ろ。」

「雛雅！！！」

雛雅が村に向かった。

ガチャッ

「あれ？雛雅雅は？」

「美麗。村に行った。」

「どうして？駄目だよ！！雛雅が！」

「雛雅が来るなって言うから。」

「……。」

「はあく。美麗行くか。」

「うん！」ニコッ

美麗と梗式が教会から、村に向かった。

タッ

「妖の匂いがする。」

雛雅が鼻で嗅ぐ。

そして、雛雅を見た村人たちはざわめき始める。

「教会の奴だ。」

「何しにきたんだ？」

「妖怪を連れてきたのはあいつじゃ無いのか？」

「何で、ここに？」

「気持ち悪い。」

「……。」

雛雅は無視していた。

そのまま、村を歩いていたら……。

バンッ！！

「痛ッ！……。」

雛雅の頭に石を投げってくる幼い男の子が居た。

雛雅は頭に怪我をした。

「……はあ……。」

だから人間は嫌いだ。

自分自身と違う生き物を否定したがる。

「……居た。」

雛雅の目の前に巨大な妖怪が現れた。

「グワアアアアアアアアア！！！！」

「操られてるのか。」

……やめたい。傷つけない。

「そうか。それが本心か。」

助けてくれ……。

「なら、俺が助けてやるよ。」

雛雅の背中に背寄っていた日本刀を出す。

「氷華爆憐衝！！！！！！！！」

「ウワアアアアアアアアアア！！！！！！」

雛雅は日本刀を直した。

妖怪は正気を取り戻したが、消えかかっていた。

「ありがとうな……わしを助けてくれて……ありがとう。」

「……ごめん。今度。俺の教会に遊びに来いよ。」

「行くさ……わしの大切な命の恩人……だから……。」

妖怪は消えた。

ポタッ

雨が降ってきた。

「雛雅！」

「…そつか…楽しみにしてる。」

「雛雅！大丈夫？」

「ああ…大丈夫だ。」

「頭、怪我してるじゃない！」

美麗が頭の手当てをする。

「雨かあ、梗…。」

「なんだ？」

「俺は救えたかな？…妖を…。」

「救えたよ。だから、泣くな。」

「…泣いてない…。」

俺は、妖が好き。

妖が消えたりしたら、俺は悲しい。

知らないうちに泣いてしまう。

だけど、俺は…”黒幻の陰陽師”妖怪を斬る者。

2話 半妖

「雛雅、大丈夫かな？」

「いつもの事だけど、あれは多分。重傷だな。」

「…見てきた方が…。」

「今は一人にしてやれ。」

梗式と美麗が教会の窓からじっと雛雅を見ていた。

「…ん？。」

雛雅の鼻が利く。

「人の匂い。誰かが教会に近づいてくる。」

雛雅は木から降りる。

「なんだ？妖の匂い？人の匂い？」

両方の匂いが近づいてくる…。

そして、雛雅の目の前に一人の少女が居た。

猫耳が生え、9個の尻尾が生えて見た目は人間なのに違う。
九尾の妖怪のようで違う。

「お前、誰だ！」

「…わしは、九尾の血を引く半妖。」

「半妖…なんでそんな奴が！」

「黒幻の陰陽師が居ると聞いた。」

「それは、俺だ！何か用か！」

「お前には出来るのか？」

「何を？」

「わしを人間に出来るのか？」

「!?!?。」

半妖の少女が突然雛雅に聞く。

「わしは、人間になりたいのだ！」

「!?!?。」

俺の嫌いな人間になるのか?..。

「頼む！陰陽師!!」

パシッ!

「!?!?。」

「妖が雛雅に何か用か？」

「なんだ、貴様は。今はわしと陰陽師が話している！手を離せ！」

梗式が来て、半妖少女の手をつかんでいた。

「梗:。」

バサッ

「!?!?。」

梗式が自分の上着を雛雅の頭にかぶせる。

「顔色が悪い。部屋で休んだ方がいい。」

「大丈夫だ。」

「: 貴様。」

半妖少女が刃を出す。

「梗!!」

シュッ!

「刺さないのか？」

半妖少女は梗式の首の直前で刃を止めていた。

「わしは戦う気などない。話をしにきたただけだ。」

「そうか。じゃあ家に入れ。」

「わしは半妖だぞ？」

「雛雅が顔色悪いし、ここで話しても悪化するだけだ。」

「分かった。」

3人は教会に入った。

「雛雅！大丈夫？」

「美麗、大丈夫に決まってる。」

「そっか」ニコッ

ドキッ！

「……。」

雛雅は頬を赤く染める。

「その子は？」

「半妖だ。」

「なんだ？教会と言っても、数人しか居ないんだな。」

半妖少女は椅子に座る。

雛雅はソファで寝転ぶ。

「さっきの話だけど。何で人間になりたいわけ？」

「！?…。」

「わしは、人間がうらやましい！だから!…。」

「いいよ。」

「雛雅！」

「本当か!！」

「だけど、あんたは後悔しない？半妖のままで良かった。って」

「後悔は昔したきり、していない。だがもう決意したのだ。」

「そっか。人間はとても哀れ。」

「えっ？」

「自分自身、目の前で大切な人が居るのに、力がないから助けられない。」

「そんな後悔とかしない？」

「……。」

「じゃあ、するよ。」

雛雅は左目の包帯を取る。

「!?…。」

「…妖の血は全て貰う。俺の人間の血を上げる。」

「なら、陰陽師は妖怪になるのではないのか！」

「なるかもしれない。」

「なら、わしはやらない！」

「?!。」

「わしは、他人を傷つけたり、そんな悲しい事などはしない。」

「そうか。なら、あんたここに居れば？」

「いいのか？」

「あんまり、人は来ないし。俺も人離れしてるし…。」

「??。」

雛雅は右目の包帯を巻きなおす。

3話 招待状

ガタッ

「雛雅、起き…!?!。」

パチッ

「ん?…どうした?梗?」

「お前…。」

「ん?…ああ、九尾の尻尾があまりにも、気持ちよくて。一緒に寝てたな」ニコッ

「お前…男と女だぞ、それをわきましろ!!」

ガタッ

「もう、梗式。朝からうるさ…!?!雛雅!!!!!!」
パチッ

「ん?…人間は朝になればこんなにもうるさいのか?」

「「あんたのせい!!!!」」

「あんまり、わめくな。わしも耳がキーとする。」

「つて、九尾。名前は?」

「夜桜。
やあつ」

「カッコイイ名前だな。」

「そうか?普通の名だろう?」

「そうなのか?」

夜桜と雛雅は意気投合だった。

バタンッ!

「雛雅、梗式。ちょっと来なさい。」

「???。」

「分かった。」

雛雅と梗式が神父に呼ばれた。

「おじさん、どうかしたの？」

「二人宛にこんな手紙が来ましたよ。」

「手紙？」

雛雅がその手紙を受け取る。

内容は…。

『平鬼雛雅様、悪那梗式様へ

機械があれば、我等の館にこられませんか？

明日1時に使えるの者をおくられますので。』

「誰が、出したんだ？」

「だが、行くのか？」

「機械があればと書いているのに、明日1時とか意味不明な手紙だな。」

「だけど、どうする？行くか？」

「行ってもいいけど。」

「なんだよ、それ。」

「だけど、数日にあいつが来るって言い出すんだよ。」

「誰？」

「それは、秘密。」

「数日っていつ？」

「一週間後。」

「！?。」

「って、興味ないし。行かない。」

雛雅は部屋から出ようとする。

「雛雅！」

「…この手紙。妙なんだよ。俺が黒幻の称号を持っているから招待をするのはおかしくない。

だが、なぜ。お前を呼ぶ？」

「…助手だからか？」

「そんなバカか。俺は一人でも立派な男だ。」
「はいはい。」

ガタッ

雛雅は部屋から出て行った。

「ふわあゝ…眠い。」

雛雅は庭の木に登った。

「……ZZZ。」

雛雅はそのまま眠ってしまった。

『お前つて、本当にガキだなあー。』

『うるせえー！！なんだよ！！』

『俺とお前は親友だもんなー！！』ニコッ

『…当たり前だー！！』

パチッ

「ん？…夢かあ…。」

「ふふふ。」

「！？…。」

「子供かあゝ…。」

ムカツ！！

「俺を…子供扱いするな！！！」

雛雅は目の前の変な仮面をつける人の腹を蹴る。
仮面の人は木から落ちる。

「はあゝ…だから、大人は…。」

「子供のくせに!!」

「!?!?…お前、妖か?」

「ん?そくだ!夜桜様の使いの者だ!夜桜様はどこだ!!」

「夜桜の?」

「様を付ける!!」

「夜桜!!」

ガタッ

「ん?どうかしたのか?雛。」

「お前の使い。」

「ああ、豹。」

「夜桜様。」

「どうかしたのか?」

「主様が…。」

「分かった。雛。わしはしばし森に帰る。」

「了解。ゆっくりして来いよお!。」

「分かっている」ニコッ

「じゃあな!。」

「うぬ。」

夜桜は豹は去って行った。

「ふわあゝ…もうひと眠りするかなあゝ…。」

3話 使い

手紙が来て、一週間。

「返事が来ませんね。」

「使いを出すか。」

「誰をです？」

「お前だ。」

「正気ですか？」

「当たり前だ、さつさで行け！」

「はあゝ、しょーがないですね。」

ガチャッ

男が部屋から出て行った。

「本当に、世話が焼けますねえゝ」

男はつぶやいたら静かにその場から消えた。

ドクンッ！！！！

「！？。。」

雛雅が突然目を覚ます。

フラッ…ドンッ！！！！！！

雛雅が木から落ちた。

バンッ！！！！

「雛雅！凄い音がしたけど、どうかしたの！？」

「痛…。」

「雛雅！大丈夫？」

慌てて美麗が雛雅に駆け寄る。

「大丈夫だ……。」

「それなら、良かったです。」ニコッ
ドキッ!

「……ああ……。」

雛雅は頬を赤くした。

「あなたが、平鬼雛雅さんですか？」

「!?!?。」

突然、男が雛雅の後ろから話しかけてきた。

「んぐっ!?!!」

男が雛雅の口をハンカチで塞ぐ。

「雛雅!あなた、何をするんですか？」

「ああ、ちよつと。この人は少し興味深いと思ひまして」ニコッ

「……意味が分かりません!?!!」

「……。」

ドンッ!?!?!!

「!?!?。」

雛雅は男の腹にひじを思いつきりぶつける。

その瞬間に雛雅は逃げる。

「お前、俺に喧嘩を売った事後悔しろ!?!!」

雛雅は日本刀を出す。

「これは、威勢がいいですね。」

「美麗、下がってろ。」

「うん。」

雛雅は美麗の前に立つ。

「私は、君に用があるだけです。別に戦う気なんてありませんよ。」

「……俺に?」

「そうです」ニコッ

「「ほざくな!?!?!?!?!」」

雛雅の声と誰かの声はもった。

後ろから誰かが男を蹴った。

「!?!?。」

「使いなら、帰れ! 3日後にそっちに行つてやると、伝える!」

「!?!?。」

雛雅はとても驚いていた。

「そうですか、分かりました。」

男は消えた。

「ラキ、やりすぎだぞ。」

「別にいいでしょう?」

「困りますねえ!」ニコッ

「久々だな! 雛雅」ニコッ

「!?!?。」

「誰?」

「ラキ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2649ba/>

黒幻の陰陽師

2012年1月13日21時47分発行